

平成 30 年度プロジェクト研究実績報告書

【研究課題名】	地域と情報大のヒト・モノ・コトを記憶する Web サイト「ちば Active!」の開発・運用
【研究代表者】	河野 義広（東京情報大学・助教）
【研究分担者】	堂下 浩（東京情報大学・教授）
【研究の目的】	<p>地域の孤立は、地域内外の人々の交流を妨げる要因であり、地域活動の活性化における問題点の 1 つとなる。例えば、本学の近隣地区である四街道市吉岡地区は、市の中心部から離れている地域であることから、隣接する千葉市との連携や地域住民同士の交流が地域活動において重要される。同様に、千葉市花見川区では区内に鉄道の駅がないことや道路渋滞が問題となることから、区外からの人の流入に課題がある。地域内外の人々の交流を促進するには、魅力的な地域活動とその活動が認知される仕組みが不可欠である。</p> <p>そこで本研究では、地域活動に参画する地域内外の人々の増加、並びに持続可能な地域活動の実現を目的とし、地域活動の仕組み作りや情報発信に取り組む。具体的には、地域の小学生達を中心としたまちづくり企画「こどものまち」の企画運営や活動支援を通じて、子ども達、子育て中の保護者や地域住民、地域活動を支援する NPO や自治体、大学や大学生など、多様な世代が関わる仕組みを構築する。加えて、地域活動の情報発信として、地域と情報大のヒト・モノ・コトを記憶する Web サイト「ちば Active!」の開発と運用を推進する。対象地域は千葉市、四街道市、佐倉市、香取市とし、地域の魅力や歴史、イベントの告知や報告、情報大の研究成果を発信し、地域と情報大の過去から現在、未来へ人々の記憶を繋ぐ Web メディアを目指す。</p> <p>上記活動と並行し、地域活動に関わる学生の教育効果を評価するため、学生の主体性、地域交流、子どもとの接し方、IT スキルなどを定期的に計測する。これら各能力要素の評価指標を策定し、定期的に観測しながら、地域活動の種類や度合いと照合し教育効果を評価する。</p>
【研究報告】	<p>本プロジェクト研究では、地域活動や研究成果を記録するための Web サイト「ちば Active!」を開発・運用し、地域の活動記録を随時発信した（図 1）。主として取り組んだ地域活動は、以下の 3 点である。</p> <ol style="list-style-type: none">(1) 四街道市を中心とした「こどものまち」の企画・運営(2) 千葉市若葉区での「こどものまち」の参加・「IT 大学」の開催(3) みつわ台夏祭りや情報大翔風祭での「IT 大学」の開催 <p>(1) 四街道市を中心とした「こどものまち」の企画・運営について</p> <p>学生達は、地域の小学生達が主体で行うまちづくりプロジェクト「こどものまち」に参加し、子ども達のサポートをしながら、地域の大人達と協力して活動を進めた（図 2～4）。こどものまちでは、子ども達が考えたお店、市役所や警察などの行政機関の仕事を体験し、働くことやお金の流れを知ることが目的である。</p> <p>四街道市でのこどものまち開催は、平成 30 年度が 3 年目であり、昨年度と同様に四街道市吉岡小学校に加え、千葉市千城台東小学校の小学生達と合同で開催した。企画の段階からゼミの主体</p>

的に参加し、チラシの作成や各種企画、地域住民との関係構築、吉岡小学校や千城台東小学校の児童の企画サポートや事前準備、当日の運営に至るまで、全行程にゼミの学生が関わった。



図 1. ちば Active ! の Web サイト

四街道こどものまちは、2018年9月1日、2日の2日間で開催され、初日は四街道市吉岡小学校、2日目は鷹の台公園で開催された。図2は、子ども達が考えたお店の看板や商品作成などの準備作業の様子である。図3は、こどものまち当日の様子であり、ゼミで開発したお仕事センターシステムを使って、子ども達が体験したいお仕事を自分で選んでいる様子である。図4は、2日目の鷹の台公園での開催の様子であり、初日と2日目で趣の異なる点の特徴である。

学生達は、夏休みの本番に向けて、子ども達と一緒に企画を考えたり、お店の作り方を教えたり、たまにふざけている子がいれば叱ったりして、子ども達との関係を築いていく。同様に、動画制作やFacebookでの発信など、地域活動の取り組みを学生達が積極的に発信した。



図 2. 四街道こどものまちな様子 1



図 3. 四街道こどものまちな様子 2



図 4. 四街道こどものまちな様子 3

上記活動と並行し、昨年開発した四街道こどもまちづくりプロジェクトの Web サイトのバージョンアップを行った。四街道こどもまちづくりプロジェクトでは、「こどものまち」「プレーパーク」「みんなでマーケット」の三本柱で地域活動を支え、挨拶のできるまちづくりを目指し活動を推進している。昨年度は、こどものまち特設サイトのみの開設であったが、平成 30 年度はプロジェクト全体の Web サイトとして、全体レイアウトの更新、コンテンツの充実を図った（図 5）。



図 5. 四街道こどもまちづくりプロジェクトの Web サイト

ゼミで開発した「お仕事センターシステム」は、お仕事センター（子ども達が働きたい仕事を選ぶハローワークのような場所）と銀行の機能をシステム化し、子ども達自身がタブレット端末で操作できるよう設計したものである（図 6）。当日はタブレット端末を複数台用意し、お仕事の記録と給料の支払いを簡略化し、監督者である学生の負担軽減に努めた。こどものまち終了後、システム開発を進め、四街道以外のこどものまちでも利用するために、まち作成やお店登録などの機能を Web 上から利用できるようシステムのサービス化を実現した。令和元年度のこどものまちで使用する予定である。

↓のじかんでおしごとをえらんでね

12:00 ~ 12:30

※おしごとセンター、ぎんこうは12:15~12:45



図 6. お仕事センターシステム

(2) 千葉県若葉区での「こどものまち」の参加・「IT 大学」の開催について

2018 年 7 月 22 日に植草学園大学にて開催された「わかば CBT こどものまち」に参加した。河野ゼミでは、「IT 大学」として「プログラミング教室」と「放送局でのライブ配信」を出展した（図 7、8）。プログラミング教室では、Scratch を用いて子ども達にプログラミングの体験をしてもらった。放送局では、会場に入れない保護者のために、参加した子ども達がタブレットを用いて会場内の様子を撮影し、リアルタイムで会場外のモニタに放送する仕組みである。



図 7. IT 大学（プログラミング教室）の様子



図 8. IT 大学（放送局）の様子

(3) みつわ台夏祭りや情報大翔風祭での「IT 大学」の開催について

千葉市若葉区のみつわ台駅前商店街で開催された「みつわ台夏祭り」に参加し、「IT 大学」の活動として「お祭り会場ライブ配信」を行った。モノレールみつわ台の駅前商店街とお祭り会場の野球グラウンドが離れていることから、会場の様子をタブレット端末で撮影し、その様子を駅前商店街のブースからライブ配信した。ライブ配信ブースの大型モニタやその他設備は、プログラミング教室でも連携するアイオーみつわ台学習の協力のもとで実現した（図 9）。



図 9. みつわ台夏祭りでの IT 大学の様子

また、東京情報大学の翔風祭にて、河野ゼミでは「IT 大学」を開催し、子ども達向けのプログラミング教室、名刺作り体験の他、一般の方を対象とした IT 相談コーナーを設置した（図 10）。



図 10. 情報大翔風祭での IT 大学の様子

上記活動を踏まえ、地域活動に関わる学生達の主体性や地域交流、子どもとの接し方、IT スキルなどを定期的に測定し、地域活動が学生に与える教育効果の評価を試みた。地域活動において、地域の大人達との打ち合わせや子ども達との交流、準備や各種制作に関する計画と作業など、実際の活動内容とその強度（どの程度活動したか）を記録し、それらの活動が学生の主体性や実行力、コミュニケーション力などの成長度にどの程度影響があるかを調査した。具体的には、活動内容と成長度を記録するためのルーブリックを作成し、定期的に計測した（活動内容は週 1、成長度は月 1 の頻度で計測）。学生の成長度を評価するルーブリックの一部を表 1、活動強度を評価するルーブリックの一部を表 2 に示す。表 1 のルーブリックを定期的に計測しながら、学生の活動内容とその強度も合わせて記録し、統計的な分析を行った。

その結果、作業に対する主体性が高い学生は、子ども目線に立てたかや子どもとの接し方、子どもを教え導くこと、活動の計画性に関する成長との関連が見られた。地域活動と学生の教育に関する調査を継続し、より詳細な分析を重ねることで、効果的な地域活動への関わりと学生の教育効果を両立できる活動プログラムを構築できると考える。

表 1. 学生の成長度を評価するルーブリック（一部）

	5点	4点	3点	2点	1点
子ども目線に立てたか	子どもの目線に立って行動できるよう学生を指導することができる	子どもの目線に立ち気持ちを汲み取って行動することができる	子どもの目線に立ち気持ちを汲み取ることができる	子どもの目線に立ち気持ちを汲み取れるよう努力できる	子どもの目線に立ち気持ちを汲み取るにはまだ努力が必要である
計画	自身の役割を果たすことができるよう学生を指導することができる	自身の役割を理解し、自ら計画を立案し目標まで計画を進めることができる	与えられた計画を目標まで進めることができる	与えられた計画を達成するために努力できる	自身の役割を理解し、計画を進めるためにはまだ努力が必要である

表 2. 活動強度を評価するルーブリック（一部）

	強度 5	強度 4	強度 3	強度 2	強度 1	強度 0
子どもと接する	子どもと一緒に何かを達成した	子どもと一緒に何かを作業した	子どもに物事を教えた	子どもと遊んだ	子どもと話した	子どもと全く関わっていない
作業に対する主体性	自身の作業を完了した上で、他人の作業を手伝った	自身の役割を理解して作業を完了した	自身の役割を理解して作業に着手した	指示された作業を完了した	指示された作業に着手した	全く作業をしていない

【成果の公表】

上記研究活動に関する成果は、以下の学会および Web サイトで公表した。

- ・河野義広, 河野由香, ”子ども達の主体的な学びを促進する学修支援システムの検討”, 教育システム情報学会 2018 年度 第 6 回研究会 (於武蔵野大学), 2019. 3.
- ・ちば Active!, <https://chiba-active.tuis.ac.jp/>
- ・四街道こどもまちづくりプロジェクト Web サイト, <https://yct-project.tuis.ac.jp/>
- ・四街道こどもまちづくりプロジェクト Facebook ページ, <https://www.facebook.com/yotsupro/>
- ・わかば CBT こどものまち Facebook ページ,
<https://www.facebook.com/wakaba.kodomonomachi/>

【連携先・総評】

四街道市シティセールス推進課

代表 シティセールス推進課長 岩林 誠

担当 シティセールス推進課 齋藤久光

2016 年、地域の学校 (四街道市立吉岡小学校)、地域住民 (四街道市民、千葉市民等)、貴学河野ゼミ等が連携して取り組んだ「吉岡こどもまちづくりプロジェクト」は、四街道市長寿社会づくりソフト事業として実施されました。現在は、四街道こどもまちづくりプロジェクトとして、地域の様々な主体と連携し、本市の補助等を受けながら実施しています。

本プロジェクトが実施された四街道市吉岡・鷹の台地区は、千葉市に近接し、住民の生活圏やコミュニティが両市にまたがる等、特徴がある地域です。

このような特徴のある地域で行うプロジェクトへの貴学の参画は、本市が取り組む「みんなで地域づくり」(本市に関わる様々な主体とともに地域課題の解決やよりよい地域をつくっていくこと)の推進に大きく寄与されました。

その中において、「IT を活用した地域づくり」をテーマに研究を行う河野ゼミは、子どもたちがつくる仮想のまち「こどものまち」を小学生が主体性を持って作り上げていくためのコーディネーター役を担い、また「こどものまち」の効率的な運営を図るためのシステム開発を行いました。

慣れない小学生との関わりの中で、主体性を尊重しながらも、プロジェクトの目的を遂げるための適切な導きやスタッフ (他大学生、自治会、地域住民等) との良好な関係を築きながら協調性をもってプロジェクトに携わることで、プロジェクトの成果を大いに高めることができました。

今後も、高い専門性と、新たに築かれた地域コミュニティとの関係性をもとに、魅力ある地域づくりに取り組まれることを期待します。

四街道市立吉岡小学校

教頭 油座誠市

最初は子どもたちとの距離や関係にとまどいを見せていた大学生たちが、回を重ねるごとに積極的になり、運営に関わろう、やっといこうという姿勢を見ることができました。

慣れない大学生に人見知りしていた子どもたちとも、人間関係を作っといこうという気持ちも

感じられました。

小学生特有のコミュニケーション方法に苦労もあったと思いますが、徐々にコミュニケーションがとれるようになっていたように思います。

子どもたちと話す目線ひとつとっても大学生たちの成長が感じられました。

これからも子どもたちとのこうした関わりが続いていくことを期待しています。

四街道市鷹の台自治会

会長 皆川孝壽

こどもまちづくりプロジェクトではおしごとセンターのシステムをはじめ、情報大の皆さんの技術が役立ち、子どもたちが関心を持つことに繋がった。

これからますます IT の時代が来るので、地域の子どもたちが IT の知識や技術に触れる機会を与えてもらえたら嬉しい。

今後もよろしくお願いします。

みつわ台祭り実行委員会

留守 敦

みつわ台まつり実行委員会は貴学との連携を通しまして、これまででは行うことができなかった IT ツールを使った動画配信やライブ中継を行うことが可能となりました。

モノレールからお越しのお客様に対して祭り会場がどんな様子なのかを一目で分かるようにして頂きました。

また、実行委員会からも『若者がいると祭りが若返る』や『元気がもらえる』などの声が上がっており、この連携が双方にとって意味のある連携であったと振り返っております。

私個人といたしましても『若葉 CBT こどものまち』におけるワークショップや『CoderDojo 若葉みつわ台』のプログラミング道場のボランティアスタッフとしてのお手伝いも頂き、大変よい交流をさせて頂きました。

私自身もみつわ台祭りを通して地域社会の魅力を高めるための活動を続けていくつもりではございますが、貴学においても今後の活動の幅が広がることを期待しつつ、同じ若葉区ときでの連携を深められればと思っております。